慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H. ルフェーヴルの「空間の生産」概念について：représantationの空間的発現の両義性への考察
Sub Title	The concept of Henri Lefebvre's "La production de l'espace" : a study on the equivalence of "représantation" in spatial expressions
Author	福田, 光弘(Fukuda, Mitsuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2001
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.52 (2001.) ,p.27- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000052-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

H. ルフェーヴルの「空間の生産」概念について

——Représantation の空間的発現の両義性への考察——

The concept of Henri Lefebvre's "La production de l'espace"

—A study on the equivalence of "Représantation" in spatial expressions—

福　田　光　弘*

Mitsuhiro Fukuda

This thesis intends to introduce the characteristic of the concept of Henri Lefebvre's "La production de l'espace (The production of space)" and his originality in his use of the dialectic in this thesis. The concept was discovered in his observation of "l'urbanité (the urban)" from the 1960's and the title of his work which has the same name of the concept (published in 1974) was the milestone of this kind of his observation. This thesis treats why he discovered this concept and how his discovery introduced "espace (space)", and shows the equivalence of "represantation (representation)"in his spatial dialectic.

The equivalence of "represantation"explains the alienation of space and time, and indicates the possibility of "projet (projection)"in the modern world. He showed the equivalence as progressive and retrospective in his dialectical conclusion, then emphasized the nature of the recent capitalism which manipulates mainly the"espace".

This thesis develops mainly in the introducing Lefebvre's novelty, but also aims to contribute towards the new trend of the social theory which puts stress upon the space.

1. 問題の所在

H. ルフェーヴルは 1974 年に『空間の生産』を発表する。それは 60 年代から書かれてきた一連の都市に関する著作の到達点であった。これらの一連の著作の中で，断片的に書かれつつ，より深化された概念が「空間の生産」である。それにより空間を「容器」以上の現れとして見出す機会が得られた。本論では，『空間の生産』のなかで提出する表象/再現前 (représantation) の空間の両義性に焦点を当てながら，彼が空間に与えた意義を考察する。

ルフェーヴルは，表象にイデオロギーとしての意味を与え，再現前に生きられたもの (vécu) または反省・思考実践への契機としての構想力を与える。すなわちこの両義性は，理論的概念たる「空間の生産」の形式が，実践的現実としての内容と結びついていることの証左である。彼は独自な弁証法の使用によって，この形式と内容の結びつきを明らかにする。

ルフェーヴルは「空間の生産」概念が，概念自身の固有な展開をもつものではないことを強調する。「空間の生産」とは弁証法上における「投企」(projet) の位置におかれたものである。投企において目的化され，見出されるものは「空間」(espace) である。換言すると，彼が概念化させたものは投企であり，そのなかで対象物として構成されたのが空間である。そのために，対象物たる空間を外部化させる手続きとして持ち出されたのが，疎外論であった。

こうしたルフェーヴルの方法は，常に時間に空間を従属化させてしまう社会理論の傾向への批判に結びついた。彼は時間と空間の関係を逆転させる。つまり「時間による空間の滅却」ではなく「空間による時間の滅却」により，近・現代世界の組織化原理を明示した。それは，時間偏重な近・現代世界の組織化原理への説明を相対化する試みであった。これにより，時間ならびに空間を媒介して展開した近・現代世界の組織化についての分析を

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程
（都市社会学　社会理論）

リセットさせることを可能にした。よって，本論で「空間による時間の滅却」という事態をあえて取り上げる意図は，空間が優越するものか，それとも時間かという「ニワトリかタマゴか」という議論を行うことにはない。*1

2. 社会学における空間の意義

では，社会学上において「空間」とは，一体なにであるか。G. ジンメルは20世紀の冒頭において，空間(Raum)について語っている。彼は大著『社会学』の第9章において，空間を取り上げている。ジンメルによれば，空間とは社会的な相互作用の場である。彼にとって社会的な相互作用とは社会的な形態である。その形態にとっての空間の重要性は，空間がその形態に対応する内容を可能にさせる固定化を行うことであるとする。よって空間とは，社会的相互作用が，持続して行われるにたる「容器」としてとらえられた。さらに，「持続」という言葉から察せられるように，空間とは時間により読みとられる。

ジンメルに仮託されるところの「空間」とは，社会的な相互作用の形式を考察する社会学にとって，常に時間の経過のなかで「内容」を現すところの形式とみなされる。ジンメルは以上の所論を，カントの「共在の可能性」としての空間の定義を援用することにより導出した。その帰結は「われわれが社会化形式の解明のために問題とするのは，社会化の空間的諸条件が社会学的な点における社会化の他の規定と展開にとってもつ意義である。」(Simmel 1908-1994: 218-219) ということになる。*2

このように空間とは社会学にとって，社会的相互作用が「反映」されるところの「容器」としての意義しか見いだされ難いものになる。換言すれば，社会的相互作用が充たすことによって初めて，空虚であり無であった「空間」が見出される。「空間が相互作用を可能にする」(Simmel 1908-1994: 218) のであっても，相互作用の生成に対して「空間」が賦与し，さらに賦与される関係が中心的な論点となることはない。さらには，ジンメルの論理のなかでは，空間をあらわにすることができるのは空間それ自身によってである，という同語反復に陥るのではなかろうか？ ここに社会理論における空間への見直しの必要が迫られる原因がある。

つぎに，「空間による時間の滅却」とは何かを見てみる。そのために「時間による空間の滅却」を考察することで「空間による時間の滅却」の問題圏の意義を探る。端的に「時間による空間の滅却」を示せば，私達にとって時間というものが，その主観的な「持続」としても，諸制度の「(長期) 持続」としても，日常生活の自然的態度にとり疎遠なものとなっている事態である。その結果として，時間の疎遠性を明白化する手続きに付随してしか空間は見出されない。その例として，昨今の代表的な社会理論家である A. ギデンズの論のなかでの空間の扱いを参照する。それにより，私達にとって時間が疎遠なものとして扱われる文脈のなかで，いかにして空間が疎遠化されているかをごく簡単に示してみる。

ギデンズは『社会理論と現代社会学』のなかで，「時計時間」が近代社会の空間を組織化する上で，必要不可欠なものであることを示す。彼にとって，空間もそのうちに入ることとなる「資源」とは，権威的なものと分配的なものとに分けられる。そして，前者による監視＝モニタリングの契機が，近代的な諸組織においてより重要であるとする構造化理論を論じる。そこでは，空間は「時計時間」に基づいて組織化されていることが語られる。

彼によれば，空間とは，相互作用の舞台＝状況 (setting) であり，そこでは諸活動が配置され分布されるに留まらない。舞台＝状況はそれ以外の様々な諸舞台＝状況 (settings) における活動が展開される「場」(locale) との調整を受ける。なぜなら，それぞれの諸舞台＝状況における活動の意味とは，それらの結合により社会的に明確な「形式」を持つことになるからである。*3 その調整をもたらすものが時間である。それ故に近代世界に於いて，空間は「時計時間」を抜きにして語ることはできず，時間-空間として体現される。

以上からも判るとおり，私達にとって時間とは何にもまして「時計時間」である。主観的な「持続」としての時間にしても，諸制度の「(長期的) 持続」とされる伝統についても，(完全かどうかは別として) 見いだし難くなっている。時間の経験が組織化され，それが主観的な枠組み，ないしは社会的な制度の枠組みに結びつけられる様態は様々である。しかしそうした様々な様態について，ギデンズはハイデッガーを引用することにより「われわれの生きている現代は，根源的に『歴史記述的』であるが，人間存在の歴史性を『忘れ』がちなのである」(Giddens 1987＝1998: 195) とする。以上の所論をもとに，カントの時間概念は「空白の時間」という中身を持たないカテゴリーであるとする。*4 それは，リアリティーを秩序化するためだけの先験的な次元としての時間であるとして批判される。

近代における時間-空間という特徴を語るにあたり，ギデンズは「時計時間」の決定的な役割を中心にして分

析を行う。しかし彼にとっては，カントに託して時間を考究するにあたり「空白な」としたカテゴリーについて，空間においては適用しうるとする。彼は時間に関して「空白」とする，近代以降における常識の慣例的な基準として批判的に取り上げたものを，空間に関しては適用できるものであるとする。(Giddens 1987＝1998: 194) 彼の構造化理論が提唱する，モダニティにおけるモニタリングの発動と「時計時間」との関わりを分析する議論は，空間の組織化へと向けられる。彼の以上の議論は「時間の商品化」，すなわち貨幣価値を抽象労働の単位とするマルクスの議論により，強化させた。それにより「空間の商品化」としての「人工的に創られた環境」，すなわち「建造環境」(built environment) を導出する。換言すれば，時間による空間の疎遠化という議論のたて方である。

以上の議論で明らかになように，ギデンズの議論は，時間を「空白」として当初から批判の対象としている。それ故にその空白性へ向けて探求が行われる。しかし空間についてはあくまでも時間に付随した形で探求されるのであり，「空白」としてカテゴリー化されたままで議論の俎上にのせられる。これは，「時間の滅却」という事実について，「時計時間」を批判することで時間を解き明かすことに成功しているといえるかもしれない。しかしそれは，空間自体の疎遠化を語るにあたり，空間を当初から「空白」としている。すなわち疎遠なものとしての空間を，分析の外においておくことを認めていることになる。よって彼の議論のなかには空間を近代以前から疎遠なものとして語るための概念を持ち得ない。そして空間を「建造環境」として語るということにより，必然的にかれの展開する議論の「外」のものとして空間は扱われる。換言すれば，あるものの意味を別のものの意味により決定しているということである。ギデンズはハイデッガーに仮託して，人間存在 (Dasein) は，その構成にまつわる諸条件たる時間を忘却しているという問題圏を指摘するものの，空間について等閑に伏したままである。

しかし E. ソジャによれば，以上のようなギデンズの議論における場 (locale) に空間を見出す手がかりがあるとする。それは場所性 (place) を見いだす契機として，ギデンズの議論を解釈することにより見出されるものである。社会生活の結節性 (nodality of social life) は，その稠密度合により中心と周縁を形成する。この結節性が宿るのが場 (locale) である。場と場のあいだの関係は，結節性の中心性が高いほど近接したものとなり，周縁性が高いほど疎遠なものとなる。ギデンズはこれを時間-空間の距離化 (time-space distanciation) として，近・現代世界の組織化を論じる。この組織化原理を司るものがギデンズにとって時間であることは間違いない。しかし，人々の生活において結節性の高まる空間ができあがる。ソジャはそこに，ギデンズの時間に付随した空間では語れない場所性 (locality) の可能性が生まれることを指摘している。

ソジャは時間 - 空間の距離化が促進した主要な結果として，アーバナイゼーションをとらえる。アーバナイゼーションにより，場所性の稠密度の度合いが強いところに，都市性が宿る契機をみる。すなわち空間の疎遠性を，場所性に根ざすことでとらえ返そうとするわけである。(Soja 1989: 138-156) しかし，ギデンズが把持した時間-空間論のなかでは，時間に準じたかたちでしか空間を語る契機は見出されない。

3. 新都市社会学における空間

ルフェーヴルの都市ないしは空間についての議論が活発に行われた時期は，学史的には新都市社会学の勃興期と重なる。事実，『都市への権利』『都市革命』などの『空間の生産』に結実する流れのなかで書かれた著作は，M. カステルが『都市問題』を発表し新都市社会学の路線を決定させる以前において，都市に対する新たな視点からの探求にとっての大きな根拠となっていた。結果的にはカステルの歩んだ路線はルフェーヴルから大きく隔たることとなる。しかしルフェーヴルの議論は，未だに D. ハーヴェイや E. ソジャや S. ラッシュなどの，新たな視点から大なり小なり都市を論じる研究者たちの理論的根拠となっている。ここではルフェーヴルとの関連から都市社会学を見てみよう。

先ず，都市社会学とは何か？　先のジンメル流の定義に従えば，都市社会学は「都市」と名付けられた空間ないしは場所での社会的相互作用を記述する，ないしは実践理論化させる社会学ということになる。しかしこの領域での欧米都市社会学史上の支配的な流れとなってきたとされる (Savage and Warde 1993: 7-33) シカゴ学派ないしは新都市社会学は，「空間」ないしは「場所」に照準を当ててきたとは言い難い。

新都市社会学に先行する，最も大きな欧米都市社会学の流れであったシカゴ学派にとって「空間」とは，人間生態学が論点先取的に開示されるイデオロギー的な「容器」でしかなかった。新都市社会学はこうしたシカゴ学派を含む既存のいかなる都市社会学も，理論的な根拠を持たない常識的・自然的な概念により分析が開始される

イデオロギー的なものであると断じた。カステル等を中心とする新都市社会学は，科学的な学問は固有の「理論的対象」を持たなければならないとし，その対象を理論的に構成することを目指した。新都市社会学は，その理論的対象となるものを空間であるとした。新都市社会学は社会生活における空間的配置の影響を，「集合的消費」(collective consumption) を構成することにより考察した。

新都市社会学は，60 年代後半～80 年代にかけてもっとも差し迫った政治的問題の一つであった「都市の危機」への対応として生まれた。そこで集合的消費を考察することで，経験的研究と理論的分析を喚起しようとした。集合的消費の概念は，福祉国家の役割と構造についての批判的な考察を生み出した。新都市社会学は，集合的消費におけるサービスの低下とその再共有化が，恐らくもっとも主要な社会的課題となっていた「都市の危機」を背景に，都市運動と都市計画の課題を巡る政治的行為者としての社会階級の流動性を剔出した。また，マルクス主義由来であったことから，都市生活と資本集積との間の関係性についてより深い分析を促進した。

カステルは都市社会学を資本主義社会の矛盾への分析により統合することで再構成しようと試み，その要請に応えて構築されたのが集合的消費であった。すなわち福祉国家に体現される資本主義段階の国家のなかにある都市について，都市の生産過程の役割に注目した通常のマルクス主義者たちとは異なり，消費の役割に力点を置いた。集合的消費とは，通常国家によって担われた集合住宅・交通・医療施設などの集合的なサービスの諸形態を指すものである。カステルは集合的消費により，経済的生活の動的な性質と消費を組織する際の，国家の同時代における役割を強調する。

集合的消費はある特定の空間範囲のなかに生きる人々に適合させられる。そのため，消費への空間的な対照物となる人的・物的な流れを生む。さらに，新たな集合的サービスの出現は，既存の集合的消費に適合した労働力の再生産過程の改変を伴う。そこでは必然的に，集合的消費を巡る対立が起こる。その対立へ向けて抵抗することを通し，都市の状況を改善することを目指す都市社会運動が生まれる。さらにカステルによれば，都市社会運動による権利要求は労働力の再生産過程に接合する。この接合について，労働者階級の運動へと結びつけることを彼は説き，それにより革命的な潜在力を持ちうると主張した。よって彼は，都市社会運動を政治的流動性の源と見なした。

こうして消費を重点化させた「集合的消費」という構成単位のなかで労働力の再生産をも扱った。こうした消費にこだわった構成的手法により，イデオロギーを脱することを試みた。しかしそこには消費自体を分析俎上にのせるイデオロギー性を相対化する何の手続きも置かなかった。すなわち，消費社会として現出する現代世界への自然的態度を引き継いだ立場からの分析に終始してしまい，消費社会自体の分析への術を見いだせなかった。さらに，集合的消費と都市社会運動が行われる「容器」ないし「反映」としてしか，つまり無前提な自然的所与性のなかでしか空間は語られることはなかった。

その原因には，新都市社会学の立場においてアーバナイゼーションは，単にモダニティすなわち近代性向の，都市における実体化であるとしか考えられてこなかったことがあげられる。空間はモダニティの容器でしかなかった。それゆえに，消費が分析の要石となることのイデオロギー性について，留保を示すことができなかった。よっていかに都市社会運動の中に革命的潜在性を見ようとも，それが新たなる消費の上塗りとなるかもしれない危険性については等閑に伏せられてしまう。*5

こうした傾向は最近のカステルの著作には，さらに明確化される。情報化社会を中心に扱う最近のカステルの著書のなかで，自らの論点を「空間における時間の支配」であると主張する。(Castells 1996: 376) しかしここで優先して彼が語る空間とは，ネットワーク社会のなかで，近代的な時計時間の組織化原理が通用しなくなった「フローの空間」である。

カステルによれば「フローの空間」とは「時間のない時間」(timeless time) に支配された空間である。「時間のない時間」とは，時計時間の線性がもつ均一化へ向けての，産業資本主義と国家支配の論理がもたらした契機すらも徹底的に断片化させる，情報技術時代の時間概念として示される。情報技術はインターネットに顕著に表されるように，情報が常に文脈を逸脱し，かつ手元にあるコンピューターのモニターに共時的に表象される時間性を体現する。モニターに表される諸時間 (tenses) は混淆し，単一かつ永遠の時間世界として体現する。なにゆえに永遠かといえば，文脈依存性を抜け出した時間は，持続を文脈に依存しない。そこでは，常にランダムに構成され，それゆえに疎遠なものとなった現在としてしか，時間は言及されない。そして永遠性とは，常に手に入らないものへの探求ゆえに線的に決定されるのではなく，過去とも未来とも切り離され疎遠化された「現在」において，永遠に「現在」であるということにより把握

される。そして空間は，永遠の「現在」の付属物として断片的にモニターの中で表象される「フローの空間」として体現される。

カステルが言及するとおり，以上の議論は一見したところギデンズがモダニティの制度的特性とする前近代的な歴史的な時間性から抜け出した資本と文化が，近・現代社会へ再埋め込み化するという議論に共鳴する。さらに D. ハーヴェイが指摘する圧縮される時間-空間の議論にも共通点をもつように思われる。文脈依存性を徹底的に破壊した帰結としては，生物学的・生理的なリズムですらも，DNA にまで及ぶ情報技術とそれを受容する社会により，実存的な決定の瞬間によって取って代わられる。それは，権威的資源の持つ時計時間の標準性としてのモニタリング能力すらも，ネット企業 (network enterprise) により配分資源として加工される時間に圧倒されるという事態である。(Castells 1996: 429-468)

配分的資源を規定するはずであった権威的資源の監視モニタリングが構築したメタ・ネットワークの金融フローが，加工された時間のなかで根源的なリアリティとなる。このようなますます文脈依存性を欠き，自己言及的に「現在」の永遠性に閉じこめられてしまうなかで発現する文化様式は，ますます物質的な基盤から疎遠なものとなる。いわば文化様式自体も物質的基盤から疎遠化されるため自己言及化されてしまう。カステルは以上のような，モダニティを作動させた権威的資源の組織化原理が機能しなくなった事態を指し，ポストモダニティとする。

以上からも明白なとおり，彼は時間論的な問題設定の前提的な優位性を覆すことなく「空間による時間の滅却」を語っている。実のところ彼の議論の中に見いだせるものは「時間による空間の滅却」の契機である。依然として近代性向としての「時計時間」の単線的な時間的経過が，空間を理論化する契機を見えなくしている。永遠の現在についての議論も，「時計時間」の仮想性の延長でしかない。先ほどの集合的消費と同じく，最近では情報化を取り扱うことでも，空間はあくまでもモダニティ，ないしは彼の語るところのポストモダニティの容器でしかないのである。

4. イデオロギーとしての représantation

「空間の生産」という概念を導入することにより現れると期待されるものは，現在に生きる人間にとって疎遠なるものとしての空間である。「空間の生産」という概念は，空間性を時間性にいわば従属化させるギデンズないしは従来の社会理論を逆転させる。そこでは空間により時間が滅却されることが示される。(Lefebvre 1974＝2000: 533) しかしあえて「概念」とすることからも判るように，ここでの意図は空間の本質論的な議論を行うことではない。いかに空間を構成的に見出すために手続きを踏むかということである。

ここでは現代世界に体現された「空間の生産」概念の投企により見出される「連接状況」(conjoncture) としての現在を見てみる。彼が「空間の生産」として描いている連接状況とは，産業資本主義の世界化である。すなわち，空間が自然原料として産業に供され生産される事態である。しかし単に生産されるのではない。空間は生産関係を構成する消費財でも，生産手段でもありうる。なぜなら，空間は土地として所有されると同時に，所有された土地として，生産へと供されるためである。それゆえに「空間はむしろ社会的上部構造の前提条件でありかつその成果でもあるといった方がよい」(Lefebvre 1974＝2000: 144) のであり，所有関係を含み込んだ社会関係として提出される。すなわち空間とは私たちにとっての現在そのものなのである。以上に従えば，従来の「反映論」における空間ないしは「容器」としての空間は，二重の幻想であると排斥される。すなわち，論理的に明白なものであり，かつ実体的な自然として空間をとらえるという二重の幻想に陥っているとする。(Lefebvre 1974＝2000: 71)

「空間の生産」によりイデオロギー的状況として剔出される現在とは，生産関係自体が空間を中心的な戦略上の標的とした上で，計画的に構成された事態である。情報技術も，生産関係の空間的な構成を戦略化させるための道具となる。それに加え情報技術それ自身が，生産関係のなかで空間的に体現される。その証左として，いかに情報技術により中心が分散化されようとも，不均等発展の構図自体に揺らぎは起きない。イデオロギー的状況を最も端的に現すのはグローバライゼーションである。グローバライゼーションとは，情報技術の拡大化や，国民・主権・領土などの国民国家論の「枠組み」を構成する道具立てが動揺していることなどにより問題化されている。*6 ルフェーヴルはこうした「枠組み」の動揺を「内破-外破」(implosion-explosion) として，都市を語るに当たり描き出した。(Lefebvre 1970a＝1974: 24)

内破は近代以前の都市内部の領域設定を，外破は近代以前の都市 (ville) と農村 (rurale) の対立を無効化させた。近代以前に確定されていた領域はなきものとなりながらも，都市は ville としての実体が存続しているかの

ごとく語られる。資本主義とその戦略を担う階級としてのブルジョワジーは，このように空間の表象を道具化し，その上で空間へ向けて一定の生産諸関係に修正を加える。それは様々に内在化されていた空間の意味を，産業資本主義の生産関係のなかで，単にそれのみによってしか意味的に構成させなくする。ここに空間の「空白化」の起源がある。表象 (représantation) の空間とはイデオロギー的に空白化されたものに他ならない。こうして生産諸関係を，階級的存在としての自己にとって本質的なものとすることが可能となる。いわば，生産関係の「空間-時間」のなかに即自的にあり続けることができる自己を維持しうるのは，資本主義の生産関係に対する階級的戦略によるのであるとする。そこでは空間のみならず，時間に関する反省を引き起こす契機を失わざるを得ない事態が現出する。*7

それでは，生産関係自体を階級的戦略の標的にし，それを計画的に空間へと構成することが仮に正しいものとしたのなら，その具体的な現れは何であるのか？ さらには，空間に埋め込まれた生産関係が決定する「階級的な存在」を，何故に自己として人々はアイデンティファイしなくてはならないのか？

端的に示せば，前者に関しては産業立地・交通の組織化・郊外化などの産業化と都市化の混合した社会状況を考えればよい。そこでは明らかに経済的な審級が，多分に空間の形態を支配することになっている。私たちは，空間の上に配列された諸機関を行き来することによって，日々の生活を営む。それら諸機関のうちどこに行くか，またいかなる方法を使うかということは，各人によって様々にヴァリアントがある。それにもかかわらず空間的な諸機関の配列自体は，ほとんど生産関係の効率性のなかで決定されている。それらを選択していると考えているのは，与えられた選択肢のなかでのことである。よってその選択は，選択肢のヴァリアントの決定を受けることのなかでの「自由」であることは異論がないであろう。かりに先行する歴史的な遺産をうけて資本主義的生産関係は発展したものであると考えるにしても，その空間に含意された意味自体は，資本主義は己に先行するものを，生産性の効率の下に従属させる。

生産性の効率は，抽象労働の単位として決定され時計時間により計測される「労働時間」を剰余価値へと転用するマルクスの議論を鑑みればよい。その結果は，現代都市において矛盾として体現される。歴史的建造物をもって都市の連続性の証左とするのは，「創られた伝統」に対する無知か無反省的態度の典型である。そうでなければ，正に「観光」という名の経済効率の言明である。「時間」は時計時間の仮想性のもと，消滅している。実のところそうした空間とは，レジャーや文化などという比較的新しい名の下におかれているのである。さらに付け加えれば「モダンアート」という意味づけをすることや「住むこと」をあえてスローガンとして商業化し工業的生産に振り分けられることで，空間は新たな生産関係を作り上げている。

近・現代世界において，以上のような資本主義的生産関係は空間に拡張していく。しかしこの拡張は一見したところ矛盾として表象される。それは生産性による一致（＝居住地，観光，工場立地，すなわち交換価値）と，同時に「意味」（＝住むこと，享受すること，すなわち使用価値）という相異として，一見とらえられるかもしれない矛盾である。これら二つの拡張の間における矛盾が，空間を支配する。この矛盾を統一 (unité) として存在せしめ，よってあたかも単に与えられた現状に対する「問題圏」のなかで，時間とともに空間の問題を棚上げにしうる「認識論的地平」を与えるのが，「空間による時間の滅却」の意味である。よってそれは，生産関係を空間の問題として，時間に優先して提出する契機を示す。それが，「空間の生産」概念をルフェーヴルが投企することで体現する具体的な現れの一つである。

資本主義は空間全体に拡張することによってのみ維持される。ここで D. ハーヴェイの所論を参考にして，それを読み解いてみる。ハーヴェイは，都市空間の形成に経済的余剰の動員・生産・領有・吸収を関わらせてきたとして，ルフェーヴルを高く評価する。彼はそれを「空間的回避・跳躍」(spatial fix) として提出し，過剰な生産自体を回避するためには，資本主義生産様式としての「空間」の拡大再生産が不可欠であることを述べる。(Harvey 1985＝1991: 51-90) 資本主義的生産様式は，常に空間へ向けての意味づけを，従来の生産関係のもつ意味をはみ出す（ないしははみ出さざるを得ない）ことによって，維持し，そして世界化したのである。資本主義のグローバル化とは，商品の消費を行うことによって潜在的な労働力を再生産することや，産業労働へ単に従事することからのみでは語りきれない。資本主義のグローバル化とは，全社会「空間」の占有と統制を必要とするものなのである。

後者の自己をアイデンティファイする契機ということに関しても，以上でほとんど説明され得る。「自由」と考えられたものが単なる生産関係上の「選択肢」に過ぎないものであるとわかったとき，「自由」の担体たる「主

体」を考えることを躊躇わないこと。それはハーヴェイが指摘するポストモダニティの状況を裏書きするものである。彼によれば，ポストモダニティは，予測不可能な斬新さを創造することに著しく失敗しているのである。その極限的な現れとしてのポストモダニティの美学的判断力の優勢とは，民主的にコントロールされ組織化された「生産」である。それを支えるのも，時間-空間の圧縮に起因する地球規模での文化生産とマーケティングの席巻である。(Harvey 1989＝1999: 446) 以上が，「空間の生産」という概念により剔出される，連接状況としての現在である。

空間が生産関係として全世界的に実現されることは，交換価値による空間の席巻をよぶこととなる。すなわち，空間が「切り売り」されるもの，換言すれば断片的なものとして現れるということである。しかしその空間は「交換価値性」において，均一的なものでもある。以上の断片的なものと均一的なものとが矛盾・対立した状況が，「矛盾した空間」(l'espace contradictoire) として現れる。そして，そのなかにおける人々のイデオロギー的に覆い被された意識として現れるのが，先ほど示した「一見とらえられるかもしれない」ところの矛盾である。

以上が概念としての「空間の生産」を導入することにより遡及的に見出される，現代世界の連接状況としての現在である。そこでは「空間による時間の滅却」がイデオロギー的「表象」として描かれる。そして再び確認する。イデオロギー的表象にとって空間とは現在そのものであると。

5. 再現前としての représantation

ルフェーヴルにとって現代社会における「都市」の意義は，「空間の生産」概念を投企することで統合として見出されることを期待する「作品」(œuvre) にある。美的に発現する「作品」としての都市は，構想力を喚起させる思考実践として解釈されるものである。それは，L. マンフォードの都市研究で，その最初の著作である『ユートピアの系譜』から描かれるような，都市への構想力を巡る思想史的系譜を探る作業へ，認識論的な前提を与えるものである。

「ユートピアを巡る思考実践」としてとらえた都市は，つねにその思考実践のなかに「目的論」を含み込ませてきたことに，再現前として人々を喚起する論点を持つ。例えばフーリエにより提唱された「科学的管理」を語るファランジュにしても，そこには産業社会における共同社会の再建という，前提化された「目的論」がおかれている。こうした目的論は，現在において疎遠な対象をとらえ返そうとする「疎外論」を中心にして形成されるものである。しかし疎外論は，その観念的な「疎遠なるもの」を実体として考察すると，その後の論理展開のなかに，常に実体視された観念を，論理の「外部」として再帰させる誤謬を犯すことになる。

ルフェーヴルの弁証法は空間化させている。すなわち，対立する「肯定」と「否定」の二項に，対立を止揚する「否定の否定」ないしは「統合」は，それぞれ空間的な表現を持つ。三項はそれぞれ空間的表現を与えられると同時に，知覚レヴェルにより説明される。それを図式化すれば，以下の通りである。

- la pratique spatial（空間的実践）→percu（知覚されたもの）→無反省的な反復
- les représantations de l'espace（空間の表象）→conçu（思念されたもの）→計画化
- les espaces de représantation（表象/再現前の空間）→vécu（生きられたもの）→イデオロギー/反省・思考実践への契機としての構想力

弁証法の字義通りの時間軸上の展開では，措定された目的を第三項に置くことにより，現在における対立として現れる構造を剔出する。『空間の生産』において，三元論的弁証法の三項は共時化される。すなわち「第三項」が対立のなかに，対立を剔出するために導入される。そのとき，それら三項は共時的に発現する。

「否定の否定」の項までも，対立する二項と共時化される根拠は，各三項は投企をする現在において現出することである。その裏書きとして，ルフェーヴルが投企を行う連接状況としての現在を「空間による滅却」を受けた時間であることによっても示す。その滅却された時間とは，ポストモダン論的な分析のなかで多少ともなじみとなってきている「時間のない時間」ないしは「歴史の終焉」と表象される時間である。そして「否定の否定」として語られるのは前節で考察した表象の空間である。それは実体視された観念（『空間の生産』での例では，不動の空間としての国家）であり，現代におけるイデオロギーとして，その「空間による時間の滅却」を体現する空間的表現を持つ。前節で説明を試みた「空間による時間の滅却」とは，以上のイデオロギー的な空間の体現する現在である。「空間の生産」の概念の投企は，この「三元論的弁証法」とシールズ (Shields 1999: 160) が語る空間化せざるを得ない弁証法に特徴を示す。*8

ルフェーヴルの議論では「空間による時間の滅却」を受けた現在をとらえるために，時間は空間に則して読み

とられる。なぜなら時間は既に滅却されたもの，すなわち不動空間としての国家に，目的論的に論点先取されたもの (Lefebvre 1974＝2000: 60) として前提化されているためである。それゆえに弁証法の字義通りな時間軸上での展開は，当初から意図されることはない。だからといって，ルフェーヴルは，空間という対象の独自性が抱え込む構造的与件を無視しない。

共時化され空間化された弁証法の意図は，単に現在としての空間を剔出することのみにあるのではない。「滅却された」時間を見出すためのものでもある。そのためにルフェーヴルが用いる弁証法は「遡及的-漸進的方法」である。(Lefebvre [1953] 1970b: 73-74)「遡及的－漸進的な」方法とは，現在最も発達している科学技術の能力を享受した事態を出発点として，現状において発展しつつある可能性＝潜在力を，あらゆる意味においてとらえようとするものである。換言すれば，現在における人々の目的を，その主観にとっての疎遠性を築き上げる客観的距離を診断することによって，それを認識論的に客観化させる弁証法である。(Lefebvre 1974＝2000: 117) それは，確かに時間性に基づいている。しかし，客観化である故に，潜在性として見極めようとするものであり，概念的・観念上の展開を図ろうとしているのではない。現在において常に欠損＝疎遠なるものとして確定された「時間」の延長としての未来を，潜在性としてとらえようとするものである。ルフェーヴルが「疎外の理論がいかに必要であるか，そしてまたそれと同時にいかに不十分なものであるかが，明らかとなる。疎外の理論の限界は次の点にある。つまり疎外は全くの真実であり，全く疑う余地のないものである。……問題は疎外概念の『規定』とか，その自由主義的（人間主義的）イデオロギーとは全く違うところにある。」(Lefebvre 1974＝2000: 533) としたときに，彼が意図するものは滅却され疎遠なものとなった時間のなかで，いかにして「投企」の可能性を見出しうるかということである。*9

こうしたルフェーヴルの立場は，J-P. サルトルの実存主義と共振するものである。「遡及的 - 漸進的方法」とは，ルフェーヴル由来のものとしてサルトル『方法の問題』に言及される。サルトルはこう語る。「われわれは実存主義者のアプローチの方法を，遡行的-漸進的かつ，分析的-総合的方法，と定義したい。それは同時に対象（これは段階づけられた意味づけとして時代すべてを包含している）との間の豊穣化の力を持った往復運動である。」(Sartre 1960＝1962: 154) サルトルは人間を，その投企によって自己の外部にある「実存」と定義する。さらに「自己以外の他者と無媒介的に結ぶこの関係，労働と実践とによる自己自身のこの不断の創造」(Sartre 1960＝1962: 155) をもって「構造」とする。これは「投企」をする現在に弁証法を重点化するという点で，確実にルフェーヴルに共鳴する。

しかし，サルトルは自らの投企の根拠に置いた弁証法を「～へ向けての自己の外化」とし，一見並立しうる抽象的本質としての意志や，欲求・情念と区別しつつも，それらとの区別を行う手だてを持たなかった。すなわち認識論的な正当化を行う手続きについての関心が稀薄であった。それに対し，ルフェーヴルは「確証された」疎遠性をもとに弁証法を展開する。すなわち投企を行う自己それ自身の外化を前提とするので，根底的に自己自身を構成化しなくてはならない。換言すれば，いかに疎遠なものであるかを問い返すことにより，はじめて実践の内に対象が確認されるというわけである。

投企とは，常に目的をはらむものである。『空間の生産』における目的とは，滅却を受けない時間のなかで再現前するであろう「空間」(espace) を見出すことに他ならない。投企の目的となる対象は，その対象の与件たる「構造」を明るみに出さなくてはならない。それによって，可能性を実現する実践による見通しのうちにのみ，目的は把握されることが出来る。再現前する「空間」とは，実践の目的すなわち「投企」そのものを理論化させるところにしか見出せないのである。そこでは現在の諸条件をその後に来る変化に向かってのりこえることと，現存する対象物を不在に向かってのりこえることは同一である。ここで，不在の対象として目的化されるものが再現前としての「空間」なのである。現代世界は前節まで見てきた通り，空間的にも時間的にも疎遠なもの，すなわち不在の対象たるイデオロギー的表象とされている。それが明るみに出されるのも，潜在化されたものを再現前として投企しようとする目的があるからである。ここに再現前 (représantation) としての「空間」の契機が現れる。

ルフェーヴルが潜在性の探求のなかで，「空間の生産」概念を具体的抽象 (abstraction concréte) として不在の対象たる現代世界へと向けて投企した。それにより導き出され領有を試みられるのは表象/再現前として現れる「空間」である。「再現前」する潜在性として漸進的に把持しようとしたのが，「都市的なるもの」(l'urbanité) としての「空間」である。

本論であえて表象/再現前の空間として les représantations de l'espace を両義的に訳し，表象への対応関

係にイデオロギーを，再現前へは構想力を宛ったかはここに関わる。すなわち「空間の生産」概念は，空間の問題がわたしたちにとって疎遠なものであることを，時間の疎遠性とともに剔出する事を可能化させるのである。従来の「疎外論」の立場においては，目的化された「非疎外化された」時間を，「空間により時間が滅却」した時間のなかで考察するという，完全なる矛盾を犯していたわけである。それは考察自体が疎外されている。換言すれば，従来の疎外論で考察された時間・空間とは，近代性のなかで時間ならびに空間に対して即自的態度では考察することが不可能とされる前提を無視し，それにより描出されたものでしかない。

具体的抽象たる「空間の生産」概念とは，現在のところ内容を持たない形式である。すなわち如何なる特殊な内容からも切り離されている。それゆえに疎遠化されたものとして思考されるべきものである。そしてこの形式が語るものは，前節で中心的に示した「矛盾した空間」ないしはイデオロギー的表象の空間であると同時に，「空間」として再現前することにより内容の受肉化が期待されるものである。それは生きられ・体験された(vécu)空間として，不在のものである「都市的なるもの」として再現前することを目的化したものである。

現在のところ不在のものであり再現前を試みられる「都市的なるもの」は，その形式上の性質として集合性・同時性を司る中枢性(centralité)により定義される。それは私達の実践へ向けられた目的化が，生きられ・体験される人々の「出会い」という集合性・同時性の内容により空間に定位した時に見出される。よって都市的なるものとは，「空間の生産」概念という具体的抽象を投企することで目的化させた，形式と内容の一致である。それゆえに，彼にとって都市とは美的に調和を保った「作品」なのである。

6. 展　望

「空間の生産」概念を投企することでの利点は，「目的論」のもつ論理外在性への依存，すなわち観念を実体視することから離脱できることにある。それにより「疎外論」を共時性のなかでとらえるという契機を得る。それは時間性を軸にしなくてはとらえることができなかった疎外の問題を，疎外され目的論に委ねられた時間それ自体としてとらえる契機を示すことができる。それにより，冒頭で断った「ニワトリかタマゴか」の議論を行わずに時間ならびに空間を媒介して展開した近・現代世界の組織化原理を探求する糸口を得ることができよう。しかし「空間」を再現前させることは勿論前提になってはいる。

それはルフェーヴルが最晩期に試みようとした，彼の最後の著作『リズム分析の要素』(*Élément de rhythmanalyse*)にも現れる「日常生活におけるリズム分析」に帰結する問題である。日常生活におけるリズム分析とは，空間による規定を受けたなかでいかにして人々が「持続」としての主観的時間・空間を，身体性を通して把握するかということを探求する問題である。日常生活世界における時間・空間の把握とは「空間による時間の滅却」を受けた自然的態度に基づいて行えば，必然的に疎外化されたものとなる。しかし「空間の生産」概念を導入することで，この疎外化された（すなわち全体化として目的化され，決して全体性として措定されるものではない）対象を「問題圏」として扱うことが出来ると考える。換言すれば，現在における人々の「目的」をその主観にとっての疎遠性を築き上げる客観的距離を診断することで，認識論的に客観化させる。

「日常生活におけるリズム分析」とは，時間も空間も総じて疎外されていることを理論的に明らかにした上で，わたしたちの日常生活の時間・空間にまつわるイデオロギーの外に出る。外に出ることにより，わたしたちの無反省的・即自的な「自然的態度」によりなされる社会的実践(pratique)は，時間・空間的な規定からの疎遠性を通して，律動として伺うことができる。『空間の生産』のなかでは「空間」を「空間による時間の滅却」の問題を分析することで見出した。その上で次に見出されるのが「時間」であるとする論法である。これにより，新たにリセットされた時間と空間を媒介とした実践理論を構築する可能性を見る。

ルフェーヴルは『空間の生産』のなかで，「空間による時間の滅却」を論じ「空間」を見出した。本論では，概念としての「空間の生産」が具体的抽象物として導入され，「都市的なるもの」を目的化したときに，いかにして「空間」を析出しうるかということを述べてきた。

「都市的なるもの」は具体的抽象における形式の漸進的な敷衍により再現前し内容を受肉化することを目指されたものである。その形式の遡及的な敷衍は，イデオロギーとしての「表象の空間」を表出する。内容とされるものは「空間」へと結実する。以上，表象/再現前の両義性とは，具体的抽象物の導入により現れ出る形式と内容の両義性であり，また遡及的なものと漸進的なものの両義性である。こうしてルフェーヴルの「都市的なるもの」を「差異の空間」(l'espace différentiel)として再現前さ

せようとする投企の戦略は，明白化する。それは投企する現在の「空間」を見出し，「矛盾した空間」の偽差異性をイデオロギーとして暴き出す。差異をもとに，現代都市における新たなるユートピアへ向けての構想力を喚起する。それは内容としての実体的な「空間」，すなわち人々の「住まい」そして「生きる」ところの「空間」を差異として見出す根拠となり続けるであろう。

ソジャは，ルフェーヴルに大きく依拠して「空間」不在の存在論を，新たに空間を再定義したかたちで構築し直そうと試みる。E. マンデルの分析した後期資本主義に完全に取って代わることはないものの，優越化することとなるポスト・フォーディズムのフレキシブルな資本集積が行われる世界のなかで，不均等発展の地理的な発現がさらに顕著になることに注目する。彼は，空間を資本集積の効率化に従属させるかたちで組織化する領域化 (regionalization) が，社会参加のかたちをより空間に根差したかたちにすることとで，新たなる地域主義 (regionalism) を生み出すと論じる。(Soja 1989: 173)

ソジャは結節性 (nodality) を資本主義の空間的戦略であると同時に，場所性 (locality) の根源であるとする。それ自体結節性の集中化であるアーバナイゼーションは，モダニティの空間-時間の距離化により促進されたもののなかで中心的な一つの要素である。しかしアーバナイゼーションは，人々の社会的相互作用の規模を世界規模で拡大しつつも，必ずしもその根本的な空間に対する見方を破壊することなく拡大化させた。そしてその見方は未だに身体性に依存しているのである。よって「私達は未だ，身体性に依存した結節的な領域化のヒエラルキーのなかにすまわっている。」(Soja 1989: 152) のである。それゆえに，都市的なるもの (the urban) を「一つの統合的部分であり，そしてまた，社会的生活における空間性について，状況の中で一般的となるものを，最も根底的に特殊化させたものである。」(Soja 1989: 153) とする。都市的なるものに寄せて，ソジャは空間への社会的参加を喚起する意図を込めている。

今後の展望としては，以上のようなソジャが示す結節性と場所性のせめぎ合いのなかから，いかにして社会的生活の特殊性を見出しうるかということにかかる。*10 本論で今まで行ってきたことは，具体的抽象の投企における意図の探求であった。以後は，更なる形式の精緻化とともに，いかに内容が現れるかを探っていくことになるであろう。

【注】

*1 ルフェーヴルの『空間の生産』における以上の議論についての見解は (Lefebvre 1974＝2000: 60) を参照。

*2 あえて問題の深さを暗示するために，ジンメルを議論の俎上にのせたのであるが，彼の視野のなかに社会的相互作用の「容器」以上に空間を見いだす契機はある。彼自身は空間における社会的相互作用の持続性・固定化を認識している。さらに持続・固定化が生む心的作用に，単なる「容器」を越えた空間性へのまなざしを見いだしうる。それは，以下の引用でも明らかであろう。「社会的な意義をもつのは空間ではなく，空間の部分に関して心から生じる編成と総括である。空間断片のこの総合は特殊・心理学的な機能であり，この機能は外見上の『自然的な』所与性にもかかわらず，あくまでも個人的に変形されている。しかしその機能が出発点とするカテゴリーは，たしかに多かれ少なかれ明白に空間の直接性と結びついている。」(Simmel 1908＝1994: 217) この直接性を心得ているが故に，その喪失としての「異郷人」の分析を行うことが可能となる。

*3 「形式」は，区域化 (zoning) された時間-空間のなかでの社会的実践の反復が形成する領域化 (regionalisation) により設定される。よって領域化の「形式」とは，領域を決定する境界の形式である。(Giddens 1984: 121)

*4 カントの空間の取り扱いについてのルフェーヴルの見解は (Lefebvre 1974＝2000: 36) を参照。

*5 なお，『都市問題』におけるカステルのルフェーヴル批判は，ルフェーヴルの弁証法モデルを，通常のマルクス主義における，線的な時間軸の中に止揚を重ねる弁証法モデルと同一化することによりなされる。それ故にカステルが都市イデオロギーと断じたルフェーヴルの語るところの「都市的なるもの」は，実体的なものとして誤読される。

*6 こうした国民国家の領域設定の揺らぎに関してたち起こったガヴァナンス (governance) の問題について，それを「空間の噴出」とする植木の所論や，カステルが指摘する情報技術に由来するとするアイデンティティの再構築への契機などは興味深い。これらは，現代国家についての空間を巡る昨今の実体的な問題圏を端的にまとめたものとして，参考にされたい。（植木，1999; Castells 1997: 243-368）

*7 ルフェーヴルの終生のテーマである「日常生活批判」は，以上のような現代世界における「自己」の反省能力の可能性を規定する「現代性」(modernité) へと向けられる。『空間の生産』はこうした問題圏に対する考察を，空間性によせて描き出した彼の 60 年代後半からの一連の都市への言及より導かれた集大成であった。

*8 この三元論の根拠についてルフェーヴルは，『資本論』における「資本/労働」・「利潤/賃金」・「ブルジョワ/プロレタリアート」の二元論による分析の限界に起因すると述べる。それはマルクスが執筆時に気が付いていたものであるとし，そこへ土地・空間を新たな項として加えることで，三元論が形成される。(Lefebvre 1974＝2000: 467-469) 空間は弁証法上の三項目＝「否定の否定」として加えられる。それにより，マルクスの二元論は空間のなかで読みとられることとなる。

*9 なおこうしたルフェーヴルの立場は，エスによれば，フーコーがニーチェから引き出した系譜学と，根源を問えないものとすること，生成に分析の中心を置いていることで，親近性の強いものであると述べる。(Hess 1999: 187-188)

*10 それはルフェーヴルの終生のテーマであった日常生活への探求に直接的に関わるものである。「リズム分析」についても，彼の一連の『日常生活批判』による，余剰としての「内容」の検討を経ない限り，これ以上の言及を行い得ない。

参考文献

Castells, M. 1977, *La question urbaine,* Paris: Maspero. (=1984, 山田操訳『都市問題』恒星社厚生閣)

Castells, M. 1996, *The Information Age; Economy, Society and Culture volume I: The Rise of the Network Society,* Oxford: Blackwell.

Castells, M. 1997, *The Information Age; Economy, Society and Culture volume II: The Power of Identity,* Oxford: Blackwell.

Giddens, Anthony, 1984, *The constitution of society,* Cambridge: Polity Press.

Giddens, Anthony, 1985, *The nation-state and violence,* Cambridge: Polity Press. (=1999, 松尾精文ほか訳『国民国家と暴力』而立書房)

Giddens, Anthony, 1987, *Social Theory and Modern Sociology,* Cambridge: Polity Press. (=1998, 藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店)

Harvey, David, 1985, *The urbanization of the capital: Studies in the history and theory of capitalist urbanization, Baltimore:* Johns Hopkins University Press. (=1991, 水岡不二雄監訳『都市の資本論』青木書店)

Harvey, David, 1989, *The condition of postmodernity,* Oxford: Blackwell. (=1991, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店)

Hess, Remi, 1988. *Henri Lefebvre et l'aventure du siècle,* Paris: Éditions A. M. Metailié.

Lefebvre, Henri, 1953, Perspective de la sociologie rurale. *Cahiers internationaux de sociologie.* repris dans: 1970b, *Du rural à l'urbain,* Paris: Anthropos, 63-78.

Lefebvre, Henri, 1958 [1947], *Critique de la vie quotidienne, I: Introduction,* 2e édn avec avant-propos, Paris: L'arche. (=1968, 田中仁彦訳『日常生活批判序説』現代思潮社)

Lefebvre, Henri, 1959, *La somme et le reste, deux volumes,* Paris: La Nef de Paris. (=1959-63, 白井健三郎・森本和夫・中村雄二郎訳『総和と余剰』全六巻　現代思潮社)

Lefebvre, Henri, 1961, *Critique de la vie quotidienne, II: Fondements d'une sociologie de la quotidienneté, Paris: L'arche.* (=1969-70, 奥山秀美・松原雅典訳『日常生活批判 I・II』現代思潮社)

Lefebvre, Henri, 1968a, *Le Droit à la ville,* Paris: Anthropos. (=1969, 森本和夫訳『都市への権利』筑摩書房)

Lefebvre, Henri, 1968b, *La vie quotidienne dans le monde moderne,* Paris: Gallimard. (=1970, 森本和夫訳『現代世界における日常生活』現代思潮社)

Lefebvre, Henri, 1970a. *La Révolution urbaine,* Paris: Gallimard. (=1974, 今井成美『都市革命』晶文社)

Lefebvre, Henri, 1970b, *Du rural à l'urbain,* Paris: Anthropos.

Lefebvre, Henri, 1971, *Au-delà du structuralism,* Paris: Anthropos. (=1976, 西川長夫・小西嘉幸訳『革命的ロマン主義』福村出版，および 1977，西川長夫・中原新吾訳『構造主義をこえて』福村出版)

Lefebvre, Henri, 1972a, *Espace et politique,* Paris: Anthropos. (=1974, 今井成美訳『空間と政治』晶文社)

Lefebvre, Henri, 1972b, *La pensée marxiste et la ville,* Tournai: Casterman.

Lefebvre, Henri, 1974, *La production de l'espace,* Paris: Anthropos. (=2000, 斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店)

Lefebvre, Henri, 1992. Éléments de rythmanalyse: Introduction à la connaissance des rythmes, Paris: Éditions Syllepse.

Mumford, Lewis, 1922. *The story of Utopia,* New York: Boni and Liveright. (=1997, 月森左知訳『ユートピアの思想史的省察』新評論)

Pickvance, C. G., ed., 1976, *Urban Sociology: Critical Essays,* New York: St. Martin's. (=1982, 山田操・吉原直樹・鰺坂学訳『都市社会学』恒星社厚生閣)

Sartre, Jean-Paul, 1960, *Critique de la raison dialequtique,* Paris: Gallimard. (1962, 平井啓之訳『方法の問題』人文書院)

Savage, Mike and Warde, Alan, 1993, *Urban sociology, capitalism and modernity,* Macmillan.

Shields, Rob, 1999, *Lefebvre, love and struggle: Spatial dialectics,* London: Routledge.

Simmel, Georg, 1904, *Soziologie. Unter suchungen über Formen der Vergesellschaftung,* Berlin: Duncker und Humblot. (=1994, 居安正訳『社会学（下）』白水社)

Soja, Edward, 1989, *Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory,* London: Verso.

植木　豊，1999，「『国民国家の動揺』と空間の噴出」『情況』10 (12): 162-183.

吉原直樹，1994，『都市空間の社会理論』東京大学出版会.